

平成 29 年度「食と農のミライ」作文コンテスト
＜社会人の部＞
優秀賞

追跡

これはハラルですか？

大学の研究室にやってくる留学生によく聞かれた言葉だ。数年前から東南アジア出身の留学生が増え、イスラム教徒の学生が日本にやってくるが多くなった。彼らの生活のサポートをしていく中で一番困ったことが食事である。

イスラム教では生活全般において戒律があり、口にするものについて細かく定められている。特に豚とアルコールは禁じられており、調理段階で使用された調味料でさえも気を付けなくてはならない。日本で販売されている食品はハラルと明記されているもの以外、食べても大丈夫だと留学生に断言することはかなり難しい。高度な品質が保証される日本の食品であっても、原料生産から加工流通までのすべての過程で使用されたものを明記した加工食品はほとんどないからだ。

では、原料生産から加工流通までのすべての過程を消費者が簡単に知ることのできるシステムはないのだろうか。それがトレーサビリティシステムだ。農場で生産された農畜産物がどのように作られたのか、加工工場でのどのような衛生管理のもとどのように加工されたのか、運送会社によってどのように運ばれたのか、食料品店でどのように販売管理されたのか等々をすべて記録し開示することにより、すべての関係者がその記録を追跡することを可能にするシステムである。例えば農場で生産する農作物は、土づくりや種まき、収穫、出荷までをすべてデータ管理し生産履歴を明らかにすることで、安全性を保障することができる。また、何か問題があった場合に、その原因を早急に見つけることが可能となる。現在、牛肉や米など一部の畜農産物ではこのシステムが制度化され、生産地や生産日などを記録することになっている。

これからの農業において、食の安全の観点からだけでなく、宗教観にもとづく食の多様性という面からもトレーサビリティシステムがすべての農産物、加工食品に広まることが求められるだろう。

近年、スーパーに行くと生産者の顔写真入りの農産物が並んでいる。生産者の顔が見えるだけで安心感が格段に違う。何度か買ううちにお気に入りの生産者さんができたりもする。つい先日、いつも買っている生産者さんが友人の父親だったということが判明し、生産現場をより身近に感じることができた。このように、顔写真入りの農産物は消費者と生産者の距離を縮める素晴らしいアイデアだ。

また、顔写真だけでなく QR コードがついていて、それを読み取ると消費者に向けた生産者さんからのメッセージが読めたりする。ここにメッセージだけでなく、原料生産から流通加工までのすべての過程をデータ化して記載することで容易にトレーサビリティとなる。

生産者側の負担として記録を取る、という手間が増えるが高価な設備を導入する必要もなく比較的手を付けやすいシステムである。ただし、農業従事者の高齢化が進む中で、データ化という面では困難が生じる可能性も少なくなく、JA 等による支援が不可欠であろう。

近年では健康志向の高まりにより有機栽培や無農薬栽培が話題であるとともに、次世代施設園芸としての植物工場など多様な生産体系が取られるようになってきた。それぞれがオリジナリティを示し差別化するという生産者側の視点からもトレーサビリティシステムは有効である。特に植物工場では、露地栽培に比べ、すべてのものの出入りを管理することが容易でありこのシステムとの相性もいいように思う。露地栽培の農作物に比べて植物工場で栽培された農作物は高価になりがちであるが、トレーサビリティを取り入れることで高付加価値化が可能となり、市場での需要が増加することが見込まれる。

国際化により様々な国からの観光客が増え、東京オリンピックも控える日本において、トレーサビリティシステムの重要性が見直され、食の多様性がますます保障されることが今後期待される。